

青森県津軽地域における木育活動に関する一考察 — 『リンゴの木のワークショップ』を通して—

馬場 拓也

本稿では、筆者が青森県弘前市で 2016（平成 28）年から 2018（平成 30）年現在まで年に 1 度実施している「りんごの木のワークショップ」（以後、「りんごの WS」とする。）から地産材を使用した木育活動について振り返り、その内容と成果、今後の課題について考察したものである。

青森県弘前市は、青森県内でも有数のりんごの産地である津軽地域に属する市である。同地域では、古くからりんごの栽培が盛んに行われ、優良なりんごを収穫できるよう様々な栽培方法を生み出してきた。りんごを栽培する過程で、整枝・剪定や間伐といった、枝や幹を切る作業が出てくる。整枝・剪定は、樹形の形成や結実管理等のために枝を切る作業であり、一人前になるには、10 数年かかると言われるほど熟練した技術が必要な難しい作業である。また、間伐は、樹幹を切る作業であり、他の樹の結実管理のために行うことが一般的である。伐採された枝や幹は、りんご農家やその知人に譲るなどして主に薪として使われている現状がある。その背景には、「りんごの木は、りんごの木でしかない。」という言葉が存在するように、どうしたらりんごが美味しくなるのか、どうしたら収穫効率が上がるのか、といった観点から樹形を形成していくからである。そのため、樹幹は人工林のように樹幹が空に向かってまっすぐ伸びているわけではない。主幹は 1 m ほどしかないことから、丸太から長い板材を確保するのは難しく、工業製品をつくる上での材料としての選択肢から外れてしまう現状がある。そこで、商品の材料として使用が困難でも、筆者が木育活動の一環で実施している木工ワークショップのような形で、りんごの枝や幹を有効活用できるのではないかと考え、技術教育研究所主催・協力のもと「りんごの WS」を実施し、りんごの木を使うことよっての効果を検証した。

第 1 回目となる 2016（平成 28）年のりんごの WS では、「りんごの木の積み木くずし」と「コースター」作りを実施した。参加者アンケートより、りんごの木の素材としての特徴や加工における参加者の感想を知ることができた。翌年 2017（平成 29）年の第 2 回目のりんごの WS では、「ボックスアート」作りを実施した。2016 年の反省を生かし、りんごの木の板材や角材だけではなく、葉っぱや枝を使用することにした。第 3 回目の 2018（平成 30）年のりんごの WS では、「笛」作りを行った。笛作りでは、りんごの枝のみを使用し試みた。2016 年～2018 年までの計 3 度のりんごの WS の内容や参加者アンケートを振り返り、成果と今後の課題について明らかにする。

考察の進め方としては、まず筆者の実施している木育活動の特徴について言及し、過去三回のりんごの WS について取り上げる。特に、りんごの木の素材の利用法と課題設定について述べ、参加者からの声を比較し整理する。そして、地産材を使用した工作活動を通じた木育活動の有用性について述べ、また課題を抽出することとする。